

## 私たちの挑戦

白河市立白河第二中学校 3年 小田 しほり

「ねえ、ちょっと、あれ、見て！」

この発言に続いて、教室内にクスクス笑いが広がる。——これは、ある日の教室での出来事だ。クラスの一部の人達が、誰かの癖、話し方などを笑いの的にする。クスクス笑っている人達は、お互いにアイコンタクトをして、不快な笑いの輪を広げていく。「いつ自分がその標的になるか」それを考えると、私はどうしたらよいのかわからなくなってしまった。

私が通っている中学校では、毎年『生徒集会』が行われている。この集会は、いじめについて取り上げ、どうしたら学校からいじめがなくなるか、生徒全員で考えることを目的としている。今までのテーマとして、あだ名によるいじめ、SNSいじめなどが取り上げられてきた。生徒会役員である私は、今年度のテーマを考えるにあたり、教室でのあの出来事がすぐに頭に浮かんだ。あのようなことがなくなってほしいという思い、そして、あの場面で何をしてもよいかわからなかった自分への反省も込めて、

「身近なところで、クラスメートへの冷やかしいいじりがあり、私は不快な気持ちでいっぱい。このようなことから始まるいじめについて、生徒集会で考えてみたい。」と生徒会役員の会議の中で提案した。

「実際にそのようなことが起こっているのだから、テーマとしてぜひ取り上げた方がいいんじゃないかな。そして、この中学校をもっと良くしていきたいよね。」

と生徒会役員のみんなも私の思いに賛同してくれた。このような過程を経て、『冷やかしいいじりから始まるいじめ』という今年度の生徒集会のテーマが決定した。

生徒集会に向けて、このテーマがわかりやすくなるように、生徒会役員で台本を考えることにした。その内容を紹介したい。——ある生徒Aが、授業で同じグループの生徒が発表しているときに冷やかしたり、その発言をいじったりした。冷やかされた生徒達は、Aの陰口を言うようになり、それが日常化していった。そのような中、授業中にAが黒板に間違った答えを書いてしまう。これを見て、陰口を言っていたグループの生徒がクスクス笑うと、クラス全体にクスクス笑う声広がっていった。これを機にAに対する陰口がエスカレートし、やがてAは学校を休みがちになってしまう。それに気づいたBは、この一連の出来事を傍観者として見ていた自分に何かできることはなかったのかと悩んでしまう。昨年度末の三月から約四か月、生徒全員がこのようなことを自分事として考えてくれるように、テーマに関する事前アンケートを実施したり、この台本に

合わせてスライドを作成したり、綿密な準備を行った。いよいよ、生徒集会当日がやってきた。生徒全員がスライドに見入っていた。その後、次のような問いを投げかけた。

「この事例のどこが問題だったか」「自分がBさんだったらどうすればよかったか」「どこからがいじめになるか」私は、これらの問いに対する生徒の発言をマイクを持って聞いて回るといった役目であった。

「人の発言や行動を冷やかしたり、いじったりするのは良くない。自分がそのようなことをされたからといって、集団で陰口を言うことも良くない。」

多くの発言者が真剣な表情で語ってくれた。その表情を間近で見た私は、みんながこの問題について真剣に考えてくれているということをとてもうれしく感じた。生徒会役員が一丸となり、生徒集会を意義のあるものにしようと試行錯誤を重ね、主体的に取り組むことができたということもとてもうれしかった。

良い学校とはどのようなものだろうか。学校は私たち生徒が一日の大半を過ごす場所である。私は、初めに述べた出来事のような冷やかしいいじめ、そしてそこから起こるかもしれないいじめがない学校が良い学校であると思う。学校は、生徒全員が安心・安全に学ぶ権利を保障できる場所であればならない。そのためには、一人一人が、相手の人格を尊重する態度、自分と異なる他者を尊重する態度を持つことが大切である。学校全体でこうした態度が大切であるという意識をもつことができれば良い。あの生徒集会を成功させた私たちの学校であれば、きっとできると信じている。冷やかしいいじめのない、みんなが笑顔で過ごせる学校にすることを。——それが、私たちの挑戦だ。